

佛乗寺檀信徒の皆さまへ

日蓮正宗 佛乗寺 住 職 笠原建道

今年最後の支部登山が十二月六日にございました。御登山された皆さま、大変ご苦労様でした。登山部をはじめご盡力下さった皆さま、ご苦労様でした。皆さまのお陰で素晴らしい登山会になりました。明年も三回の支部総登山が計画されており、今回参加できなかった皆さまも、いまから予定をたて、体調を調べて、四条金吾に与えられた、

「毎年度々の御参詣には、無始の罪障も定めて今生一世に消滅すべきか。弥はげむべし、はげむべし」 (『四条金吾殿御返事』一五〇二頁)

とのお言葉を信じ、共に励もうではありませんか。

《御法主上人のお言葉を拝して》

住職

当日の午前八時から客殿において奉修された「広布唱題会」では、御法主日如上人のお言葉がありました。

猊下は、『心地観経』の、

佛日は三千界に出現し、大光明を放ちて長夜を照らす。衆生は睡れるが如く覚知せざれども、光りを蒙れば無為の宝に入ることを得ん

(『大乘本生心地観経巻二』国訳一切経印度撰述部 経集部 六)

を引用され、大御本尊様の無量の功德を教えて下さいました。この御指南を拝して私は次のようなことを思いました。

それは、大聖人様は常に成仏の道を示して下さいているのに、私たちはそのことに気づかず、自己の心のままに過ごしていることです。まさに「睡れるが如く」です。しかし、有り難いことに、そのことを知らなくとも「無為の宝に入る」つまり、成仏が叶う、とされます。しかれば、功德があることを信じて、積極的に大聖人様の功德を求むるのであればより一層大きな功德を受けられる、ということです。言葉を換えれば、仏様が発信して下さいする功德を受けるためには、功德を受信するアンテナをもつことが大切である、ということです。

また、不軽菩薩の姿を通して折伏の功德を教えて下さいました。その中で、私の心に残ったのは、

「不軽菩薩が杖木瓦石を耐え忍んで礼拝修行を続け、その命が終わろうとしたときに、六根清浄の功德を得た。このことを見聞いた増上慢の四衆は、それまでの杖木瓦石のおこないを悔い改めて不軽菩薩に信伏随従した」(趣意)

というお言葉でした。

このお言葉を拝したとき、次のようなことが脳裏をよぎりました。それは、邪教となった創価学会の邪義を破折して、不軽菩薩のように、杖や木で打たれたり、瓦や石を投げつけられた方のことや、所を追われたり、会社を首になっ

たり、親子の縁を切られた人のことです。住職である私も、車で家庭訪問に出かけたときに、尾行してきた車との間で、身の危険を感じたこともありました。しかし幸か不幸か、杖で打たれたり、石を投げつけられるような迫害には未だ遭遇しておりません。大声で怒鳴られたり、悪口を新聞や雑誌に掲載されたり、掲示板に出鱈目を書いたものを張り出されたりすることは日常的にありました。ところが、洗脳された創価学会員の姿を見聞き、不審に思った創価学会員が数多く脱会して、今日の法華講の中核となって広布に活躍されていることです。

六根清浄の功德などは私たち凡夫には思いもよらぬことですから、不軽菩薩様と同類に考えることは絶対にできません。もしそのように思うなら、その思いが成仏の妨げになるでしょう。ただし私たちが、恐れず怯まず、「日蓮大聖人様の正しい教え・日蓮正宗富士大石寺の教え」を弘めるために「(御書の)一文一句」なりとも語っていることは、不軽菩薩様の礼拝修行に劣るものではありません。私たち法華講衆の姿を見聞きして、自らの誤りに気づいた人たちが正法に立ち返ったことは紛れもない事実です。

御法主上人は次のようにも指南されました。

「過去の不軽菩薩の修行は現在の私たちの折伏である」(趣意)

と。

ですから、私たちだけが成仏するのではなく、不軽菩薩に杖木瓦石を加えた増上慢の四衆がやがて成仏したのと同様に、さんざん日蓮正宗の悪口を言い、御法主上人に悪態をつき、すぐには勸誡を受けることができない創価学会員も、やがては仏様の御加護を頂くことが出来るようになるのです。大謗法の集団である池田大作創価学会を破折することで、私たちの成仏が定まることは間違いありません。

総本山の客殿で奉修された十二月の唱題会に御法主上人のお供をし、御指南を拝して思ったことを記しました。

本年も残り半月になりました。五濁悪世のゆえか、季節が逆行しているように感じられます。このようなときであっても、御本尊様を固く信じている私たちには不思議な御加護があります。強く信じるのが肝要です。自他共の幸せを願う心をもって、お正月を迎えましょう。

佛乗寺の檀信徒が一人も残らず良き年を迎えられることを御祈念申し上げます。